

第43回「はちしん灌花塾 ～郡上の歴史の補遺を学ぶ～」開催

7月29日(土)第43回「はちしん灌花塾」が本店6階大会議室において開催されました。

地域史家高橋教雄先生をお招きして「八幡城再建の時代」と題して講義いただき、当日は当金庫の役職員や一般参加の方35名が受講しました。



<昭和初期の時代>

八幡城が再建された昭和8（1933）年は、世界大恐慌の影響で日本経済は大混乱となり、農村部も大不況の時代であった。そうした状況の中、“再建計画は不況の時代、手に職あれど仕事なし、こんな時代に無謀な築城計画だ”と非難の声があがった。

仲上忠平八幡町長は、“こういう時こそ、計画は不況にあえぐ住民の救済策の一環であり、町活性化と町の発展、ひいては子孫の幸せに資するは、歴史文化の厚さに負うところが大きい”と議会で答弁し、八幡城再建計画は議会、町民に共有された。

<建設中 郡上八幡城>

建設にあたり町は寄付金集めに尽力し、平野増吉^{ますきち}300円、匹田鋭吉^{ひきたえいきち}100円、川村佐助^{かわむらさすけ}100円、八幡城建設協賛会 東京支部810円、そのほか150人から合計で3,626円の寄付があった。

設計は町助役の佐藤幸之助^{こうのすけ}、宮大工の水谷藤兵衛^{とうべい}が彦根城・犬山城・大垣城を調査し、大垣城をモデルとして藤兵衛の子息 藤次郎^{とうじろう}が設計した。

設計にあたり歴史的検証は行わず、写真・絵図を参考に“外観はどこから見ても美しい”を設計のモットーとした。議員の鷺見甚造^{しんぞう}が八幡駅付近で旗を振り城郭の配置や向きを指示したとの逸話がある。

天守閣は山頂の杉を使い50尺余（15.5m）、6寸角（18cm）の心柱^{しんぼしら}4本を立て強固な造りとした。資材は人力で運び上げ、瓦は10枚1束で3貫600匁^{そく かん もんめ}（13.5kg）を10束背負った記録がある。鯨瓦^{しやちほこかわら}（1.2m）はロープで吊り上げた。大工・左官の日当は65銭、見習い（20歳未満）は無報酬、町民の無料奉仕があった。

建設委員長は仲上町長、委員は塩谷広五郎^{えんやひろごろう}など生粋の商家の方が多かった。

昭和8（1933）年10月26日竣工、高さ60尺（18.5m）、1・2階は6間四方（36坪）、3階は4間四方（16坪）、4階は9坪で四層、建築費用は8,542円13銭（町費4,916円13銭、寄付金3,626円）であった。

<郡上八幡城の建設完成>

当時は大阪城（昭和6年再建）に次ぐ2番目に古い木造模擬城で、現在は最古の木造模擬城となっている。

落成祝賀式は11月3日に来賓250名を招き行われた。一人1円20銭で一般参加者を募集した。

<その後の郡上八幡城>

昭和62年2月八幡城史跡保存会発足

昭和62年9月八幡町重要文化財指定

昭和62年6月心柱の補強と原型を変えない城郭の大改修着工

昭和63年7月竣工式 工事総額1億1,610万円

平成元年^{からめて}搦手の改修・裏登山道の開通と林間広場整備

平成2年^{すみやぐら たかかべ}隅櫓・高塀・石垣の改修

平成18年展示物リニューアル



<郡上八幡城の簡単な歴史>

永禄2（1559）年赤谷山城の戦いで遠藤盛数^{うしくびやま}が牛首山においた陣所が城の基礎

永禄9（1566）年遠藤慶隆が郡上を統一し城郭を整備

天正16（1588）年稲葉貞通が城郭の大改修、大手芝野の設置、本丸^{くるわ}曲輪に天守台、一ノ門から三ノ門を設置し近世城郭として整備

慶長6（1601）年再び城主となった遠藤慶隆は三堀^{みつほり}石垣・矢倉^{やぐら}を設置、本丸を分割して「松の丸」「桜の丸」の曲輪を設ける

承応元（1652）年遠藤常友は城下町大火の復興をするとともに寛文7（1667）年に城郭を大改修し「城主格」から「城主」となる

明治3（1878）年「郡上城撤去伺」が出され石垣だけを残し取り壊しされた

<再建前に天守閣はあったのか？>

再建前の郡上八幡城を描いた史料は、延宝4（1676）年の「郡上八幡城の戦いの絵図」（最古の絵図）、文久年間（1861～1864）の「郡上八幡城絵図」、大正の初めに発行された郡上八幡城の「絵葉書」があり、いずれにも山頂の「桜の丸」と「松の丸」の間に三重の望楼^{ぼうろう}が描かれている。再建は望楼の存在を天守閣とみなしたものと考えられる。

ただし、昭和13年に発行された『郡上郷土史料』に収録された絵図に天守閣は描かれていない。著者の喜多七五郎^{きたしちごろう}（歴史家）は、天守閣はなかったと判断していた。

<城とは何か>

中世の城は室町期将軍の「館」を手本として、贈答のための公的な行事を行う施設で、身分の上下、主従関係の確認の場でもあった。主殿と広場を持ち、日常の住まい（常御殿・台所・馬屋・蔵）が付属していた。「館」には身分を超えて宴会や文芸活動を行う「会所」が並立していた。

城の形状は土塁などで防御し、四角な地割と防御のための重層の櫓を持ち、その一角が屋敷として利用された。

<石垣の特徴>

城の石垣には体系的な組織と近世初期の技術が必要で、石垣と櫓、門、塀は一体であった。城の入り口には大きな石垣を組むなど権威の象徴であった。

郡上八幡城にも「二ノ門」から「三ノ門」まで高い石垣が築かれていたが、城山公園整備で撤去された。

<近世の城とは>

戦国大名は山城を拠点とし、日常の居住と政庁は山麓の「館」、軍事面は山頂の「天守閣」と城の機能分担をした。

近世初期の城は軍事的色彩を薄くし、豊かな経済力を背景に資源や技術を結集した造りで、他を圧倒する建築物として文化的戦略の象徴であった。天守閣は城下町の象徴として文化的な景観をつくと同時に、軍事的には要塞としての安心感を生み出していた。

五重塔・三重塔などの天守閣は精神的・仏教的聖地の一角として、すべての町民に安心の景観を提供していた。

<まとめ>

最後に先生は、「郡上八幡城の再建は単に天守閣を造ったのではなく、城下町全体の歴史文化の厚みを増すと同時に、町の象徴を再建する非常に重要な事業であった。今後は城のもう一方の機能であった山麓の「館」についても是非再建してほしい。」と締めくくられました。

【質疑応答】

Q. 右の絵図の「館」の位置は現在のどのあたりが想定されるか。

A. 城山公園の相撲場があった場所に「館」、岸剣神社の場所に「会所」、現在も残っている「井戸」の正面に「大玄関」があった。「一ノ門」の左側が「三の丸」で明治期に安養寺が建てられた。現在は「一ノ門」の右側に道路が整備され城山公園、ホテル積翠園に通じている。積翠園の場所は「館」の左側の山林である。「館」から「天守閣」には「西北道」と「西南道」が通っており、「西北道」が本道であったが現在は残っていない。

